

上演 11  
宮城県代表  
仙台市立仙台高等学校  
作 杉内浩幸  
「Face -stranger-」

講評文 山形県立山形中央高等学校 山口 葵

これは地震や津波などの天災の恐ろしさや残酷さを感じさせ、心に刻み込める作品でした。天災はいつ、どこで起こるか分からない。そして、一つの大きな天災で多くの人の命が奪われてしまう。その人達の命をどう繋いでいくかがとても重要だと思った。静江たち4人は津波が来ることを知らず、パニックになってしまった。今では地震があれば津波の危険性があると多くの人が知っている。これは、東日本大震災から得られた経験だ。天災が起こったという事実だけでなく、その中で経験したことを次に活かし、伝えていかなければならないのだろう。そして、私達はそれがあるから生きていけるのだ。だから、私達は亡くなった人達の分も生きていかなければならない。

そして、この作品の題名や劇中にも多く出てきたstranger。これは、空や海が見せる別の顔という意味だけではなく、人が持っている別の顔という意味も持っていた。しずえたち4人は危機的状況に立ち、今まで出せなかった別の顔が出てきました。しかし、この別の顔というのは悪い面だけではなく良い面もある。

この作品では、始めは本音のぶつかり合いになり、4人の関係に亀裂が入ってしまう。しかし、最後はその別の顔もあったことで絆が生まれた。別の顔を出すのはとても怖いことですが、別の顔もまた自分であることから、それも受け入れ合うといことがより絆を強くするのだろう。そして、私がこの作品で1番強い思いを感じたのが最後の葉子の「持ってくる」という言葉だ。この言葉には、静江との約束だった台本を持っていくという意味があった。約束を果たすことで葉子も演劇部の一員だと、仲間だということが強く感じられる一言だった。

照明では、地震の時の揺れを音だけでなく、照明でも表していた。また、屋上への階段を開けると光が入るところ、地震や津波が起こった時に窓が赤くひかり不安を感じさせるところなどの工夫があり、今目の前で本当に起こっているように感じられた。音響では、津波の音を手からだけ流したり、strangerの音楽と演者のセリフが意思疎通しているかのようなタイミングで流れ、その場の空気を際立たせていて、サビに入ったときは鳥肌がたった。天災の恐ろしさ、その中で亡くなった人達の命、そして私達がこれからどう生きていくべきなのかを伝えてくれる作品でした。この作品自体も次の世代に繋げ、多くの人に知ってもらいたい。